琉球大学学術リポジトリ

沖縄学士女性の目標達成要因認知の加齢変化

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2010-10-14
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 浅井, 玲子, Asai, Reiko
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/18271

沖縄学士女性の目標達成要因認知の加齢変化

浅井　玲子*

Aging Change of the Accomplishment of a Goal Factor Acknowledgement, of Okinwan Bachelor's Degree woman.

ASAI Reiko

I　緒　言

日常生活や学習等のすべてにおいて，自分自身がその目標をどのような手段で達成できたかや他者が一般的にどのような方法で目標達成したと認知するかは，その人の生き方や意思決定に大きく関わっている。ライフステージごとの課題を視野に入れ，生活価値観の創造やよりよく生きることを目標とする家庭科教育にとっても，目標達成要因の認知は大きな関心を寄せるべき研究課題であるととらえている。

目標達成要因に関する説明概念は，達成動機，統制の位置，原因帰属などで説明されてきた。これらの研究の流れを汲みながら，これまでの研究で混同されていた一般的な他者の成功・失敗の原因理解と自分自身についての原因理解を区別して検討したものとして，Ellen A.Skinner ら（1988）の CAMI（Control, Agency, and Means-Ends Interview）理論がある。CAMI 理論は，自分が目標を達成できるかどうかについての信念（統制感・自信），自分が目標を達成するための手段をどの程度持っているかについての信念（手段の保有），一般に他者がどのような手段で目標を達成しているのかという認識（手段の認識）の３つの下位尺度から構成される。この理論や応用理論を用いた研究としては唐沢ら（1993）の小学生を対象とした西ドイツと日本の文化的比較や宮下ら（2000，2001）の児童生徒の学業達成要因認知に関する研究がある。沖縄県でも島袋ら（1996，2001，2008）及び嘉数ら（2003）が小学生や高校生を対象として児童・生徒の進路発達や進路達成や，学習意識について明らかにしてきているし，目標達成要因認知は文化や習慣に影響されるものであることから，沖縄県は他県とは異なる達成要因の認知が見られる事を明らかにしている。成人を対象とした研究は，青年期の自我発達に関する分析（島袋，堀切 2001）があるが，生涯発達を視野に入れたり高齢期を視野に入れた研究は見られない。

すべての高校生が学ぶ高等学校家庭科は，重要な内容として加齢に伴う心身の変化を取り上げているし，社会的にも介護や高齢者福祉のあり方は量から質の時代へという時代を迎えつつある。しかし，高齢者について指導したり，学んだり，福祉や介護を担う者と，対象者の目標達成要因認知が同じであるとは限らず，何がどのように異なり，どのようにお互いの心理的な尊厳を守るのかについて，共通理解があるとは言い難く，今後様々な方面からの基礎的研究の展開が必要である。

そこで本稿では，成人女性の目標達成要因認知の加齢変化に注目し，CAMI 理論を応用した尺度をベースとしながら，まず，学士女性の目標達成の要因認知と目標達成の自信の関連を明らかにする。次に今回の対象者の多くが職業を退職していた60歳を境にして２分し，60歳以下と61歳以上の目標達成要因認知の違いを明らかにすることを目的とする。

* 琉球大学教育学部　教育実践学専修

Ⅱ　研究方法および分析方法

Ⅰ　研究方法，対象者および調査期間

沖縄県Ｒ大学Ｋ学科同窓会会員1061人中，住所が把握できた863人を対象に，無記名自記式質問紙調査を20008年５月～６月郵送し，回答記述後返送を依頼した。有効回収数は330部で，回収率は38.２％であった。対象者の属性を表１に示す。なお，対象者はほとんど女性であり，回収された用紙は全員女性であった。

Ⅱ　調査内容

調査項目は，①対象者の属性　②目標達成の自信　③目標達成の手段の自己保有と一般的認識である。具体的な質問項目は現在や過去の仕事や趣味，友人関係，ものの見方や考え方，自分にふさわしい職業についての目標達成の自信について，他者の援助，努力，能力，運，未知の要因の保有と認識について尋ねた。よって，説明因子も他者の援助，努力，能力，運，未知の要因あるいはその複数の組み合わせで，命名した。

Ⅲ　結果と考察

1　目標達成認知の因子分析

目標達成認知尺度30項目の平均値，標準偏差値を算出した。そして天井効果およびフロア効果が見られた７項目を除外した。なお，この時点で未知の要因の下位項目はフロア効果を示したため，除外した。更に主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は7.07，2.24，1.49，1.35，1,11…となり，４因子構造が妥当であると考えられた。そこで，再度４因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果，十分な因子負荷量を示さなかった（因子負荷量が0.4以下）３項目を分析から除外し，再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表２に示す。なお，回転後の４因子で20項目の全分散を説明する割合は57.65％であった。

第１因子は９項目で構成されており，「私が仕事や趣味などに一生懸命取り組めるのは，いろいろとアドバイスしてくれる良き相談相手がいるからだと思う」「私がこれからも自分なりの物の見方や考え方（価値観）を持てるのは，精神的にサポートしてくれる人のおかげだと思う」「私は，先輩や友人から，親しい友人関係を築くためのアドバイスを受けることができると思う」「私にはいろいろとアドバイスをしてくれる良き相談相手がいるので自分にふさわしい職業（役割や趣味）を持ち，充実した社会生活を送ることができると思う」「まわりの人がしっかりとした物の見方や考え方（価値観）を持っているのは，これまでいろいろな苦労をしてきたからだと思う」「私には精神的にサポートしてくれる人がいるので，困ったことが起こっても自力で解決することができると思う」「私はものの見方や考え方（価値観）がこれでよいのかどうか，人と話したり，自分で考

表１　対象者の属性

項　目	年　齢　別	60歳以下 人数（％）	61歳以上 人数（％）	合　計 人数(％)
年齢（歳）	22～30	30(16.0%)		
	31～40	43(22.9%)		
	41～50	57(30.3%)		
	51～60	58(30.８%)		
	60歳以下合計	188(100%)		188(100%)
	61歳以上(61～74)合計		146(100%)	146(100%)
結婚経験	有	151(53.7%)	130(46.3%)	281(100%)
	無	37(75.5%)	12(24.5%)	49(100%)
	合計	188(57.0%)	142(43.0%)	330(100%)
職業(現在)	有	145(91.2%)	14(8.8%)	159(100%)
	無	43(25.1%)	128(74.9%)	171(100%)
	合計	188(57.0%)	142(43.0%)	330(100%)

表２　目標達成要因の因子分析

	項　目　内　容	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
33	私が「仕事や趣味など」に一生懸命取り組めるのは，いろいろとアドバイスしてくれる良き相談相手がいるからだと思う	**.87**	-.11	.06	-.08
28	私がこれからも自分なりの「物の見方や考え方（価値観）」を持てるのは，精神的にサポートしてくれる人のおかげだと思う。	**.84**	-.32	.04	.10
23	私は，先輩や友人から，親しい「友人」関係を築くためのアドバイスを受けることができると思う。	**.65**	.18	-.13	-.09
15	私にはいろいろとアドバイスをしてくれる良き相談相手がいるので「自分にふさわしい職業(役割や趣味)」を持ち，充実した社会生活を送ることができると思う。	**.61**	.26	-.12	.02
29	まわりの人がしっかりとした「物の見方や考え方（価値観）」を持っているのは，これまでいろいろな苦労をしてきたからだと思う。	**.51**	-.15	.20	.07
35	私には精神的にサポートしてくれる人がいるので，困ったことが起こっても「自力で解決する」ことができると思う。	**.51**	.16	-.04	.21
12	私は「ものの見方や考え方（価値観）」がこれでよいのかどうか，人と話したり，自分で考えたりしていると思う。	**.47**	.23	-.10	-.09
10	人が「仕事や趣味など」を順調に進めることができるのは，お手本となる人がまわりにいるからだと思う。	**.43**	.04	.17	-.03
32	私は，「自分にふさわしい職業（趣味や生き方）」とは何か，本を読んだり，人と話したりして真剣に考えていると思う。	**.42**	.24	.01	.05
03	私が「仕事や趣味など」で満足のいく結果を残せるのは，そのための適性や能力が充分に備わっているからだと思う。	-.11	**.76**	.04	-.01
26	私が「自分にふさわしい職業（趣味や生き方）」を選択できるのは，そのための適性や能力が備わっているからだと思う。	-.05	**.73**	.29	-.08
13	私には「友人」関係をうまくやっていく能力や性格が人より備わっているほうだと思う。	-.01	**.71**	-.04	-.02
16	私は，何か困ったことがあっても，いろいろ努力して「自力で解決」できると思う。	.02	**.55**	-.07	.20
31	私が，ちゃんとした「ものの見方や考え方（価値観）」を持てるのは，そのための能力に恵まれているからだと思う。	.02	**.53**	.30	.13
24	私が「仕事や趣味など」でうまくいったら，それは時間の使い方を考えたり，計画を立てて取り組んだからだと思う。	.25	**.43**	.20	-.21
18	りっぱな「物の見方や考え方（価値観）」を持てる人は，その人に高い能力が備わっているのだと思う。	.14	.01	**.68**	.11
08	何か問題が起こったとき「自力で解決」できる人は，もともとその人に，高い能力や適性備わっているからだと思う。	-.08	.17	**.62**	.02
19	運のよい人は「仕事や趣味など」をうまくこなすことができると思う。	-.10	-.13	.28	**.70**
34	私は運に恵まれているため，「友人」関係がうまくいっていると思う。	.18	.02	-.01	**.51**
14	私は運が良い方なので私の取り組む仕事や趣味など」は順調に進むと思う。	-.02	.40	-.20	**.51**

因子相関行列	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ	—	.54	.11	.39
Ⅱ		—	.30	.42
Ⅲ			—	.19
Ⅳ				—

えたりしていると思う」

「人が仕事や趣味などを順調に進めることができるのは，お手本となる人がまわりにいるからだと思う」「私は，自分にふさわしい職業（趣味や生き方）とは何か，本を読んだり，人と話したりして真剣に考えていると思う」からなっている。他者からのサポートやアドバイス，また自分自身が人に聞いたり話したりする努力の保有感を表す項目が高い負荷量を示していた。そこで「他者の援助と努力」因子と命名した。

第２因子は６項目で構成されている。「私が仕事や趣味などで満足のいく結果を残せるのは，そのための適性や能力が充分に備わっているからだと思う」「私が自分にふさわしい職業（趣味や生き方）を選択できるのは，そのための適性や能力が備わっているからだと思う」「私には友人関係をうまくやっていく能力や性格が人より備わっているほうだと思う」「私は，何か困ったことがあっても，いろいろ努力して自力で解決できると思う」「私が，ちゃんとしたものの見方や考え方（価値観）を持てるのは，そのための能力に恵まれているからだと思う」。「私が仕事や趣味などでうまくいったら，それは時間の使い方を考えたり，計画を立てて取り組んだからだと思う」のように能力と自己統制的努力に高い負荷を示すことから，「能力と努力」と命名した。

第３因子は「りっぱな物の見方や考え方（価値観）を持てる人は，その人に高い能力が備わっているのだと思う」「何か問題が起こったとき自力で解決できる人は，もともとその人に，高い能力や適性が備わっているからだと思う」の２項目からなり，「能力因子」と命名した。下位項目が２項目と少数なのは分析上好ましいとは言えないが，負荷量の独自性や，第２因子の「能力と努力」に含まれる能力の保有感と比較して，一般的な認識２項目で構成されており，独自の性格を持つ因子として独立した尺度とした。

第４因子は３項目で構成されており，「運のよい人は仕事や趣味などをうまくこなすことができると思う」「私は運に恵まれているため，友人関係がうまくいっていると思う」「私は運が良い方なので私の取り組む仕事や趣味などは順調に進むと思う」と運に目標達成要因を求める項目となっているので「運因子」と命名した。

努力は独立した因子としてではなく，他者の援助や能力と同一グループ項目として存在していた。

2　相関関係

目標達成認知票の因子分析において，各因子に高い負荷量を示した項目の平均を算出し，他者の

表３　目標達成要因と自信の相互相関（全員込み）

	他者の援助と努力	能力と努力	能力	運	目標達成の自信
他者の援助と努力	－	.47***	.22***	.40***	.58***
能力と努力		－	.50***	.42***	.70***
能力			－	.27***	.25***
運				－	.42***
目標達成の自信					－

***$P<.001$

表４　標達成要因と自信の相互相関（年齢別）

	他者の援助と努力	能力と努力	能力	運	目標達成の自信
他者の援助と努力	－	.52***	.21**	.37***	.61***
能力と努力	.44***	－	.38***	.42***	.66***
能力	.25**	.54***	－	.24**	.13
運	.45***	.39***	.24**	－	.43***
目標達成の自信	.58***	.71***	.27**	.38***	－

***$P<.001$　**$P<.01$

右上：60歳以下　左下：61歳以上

援助と努力得点（平均2.68　SD.57），能力と努力得点（平均2.15　SD.63），能力得点（平均2.22　SD.84），運得点（平均1.92 SD.64）とした。内的整合性を検討するためにα係数を算出したところ，他者の援助と努力でα＝.86，能力と努力でα＝.85，能力でα＝.69，運でα＝.66と，満足できる信頼性を示した。また，目標達成の自信得点の平均値は2.68，SDは.56であった。目標達成要因認知と目標達成の自信の対象者全員の相互相関を表３に，60歳以下と61歳以上に２分した年齢別の相互相関を表４に示す。全員込みでは，すべての項目で有意な正の相関が見られた。しかし，年齢別に見るとやや相関のパターンが異なっており，61歳以上では「能力」と目標達成の自信で相関が見られなかった。

3　因果関係の検討

目標達成の４つの下位尺度得点が達成の自信に与える影響を検討するために，60歳以下と61歳以上の年齢別に重回帰分析を行った。結果は表５に示す通りであった。尚，VIF は1.7以下であり多重共線性の問題は無かった。

60歳以下では，「他者の援助と努力」「能力と努力」「能力」「運」すべての標準偏回帰係数は有意であり，「能力」から達成の自信に関しては負の標準偏回帰係数が有意であった。61歳以上では，「他者の援助と努力」「能力と努力」の標準偏回帰係数は有意であった。

結果から，両年齢ともに「他者の援助と努力」「能力と努力」を認知することは達成の自信を高めていた。他に60歳以下では「能力」「運」が影響していたが，「能力」認知は低いほど達成の自信を高める事が明らかになった。61歳以上では「能力」や「運」の認知は目標達成の自信に直接影響していなかった。

Ⅳ　まとめと今後の課題

本研究では，第一に，沖縄の学士女性を対象としたアンケートを基に目標達成要因認知と目標達成の自信の関連を明らかにした。その結果，仕事や趣味，友人関係，ものの見方や考え方，自分にふさわしい職業についての目標達成の自信は「他者の援助と努力」「能力と努力」「能力」「運」の４因子で説明できた。４因子と達成の自信には相互相関が見られた。それらは，全員込みでは，すべての項目で有意な正の相関が見られたが60歳以下と61歳以上では，ややパターンが異なっていた。60歳以下と61歳以上に分け４因子と重回帰分析行ったところ，両年齢ともに，「他者の援助と努力」「能力と努力」を認知することは達成の自信を高めていた。60歳以下では「能力」「運」が影響していたが，「能力」認知は低いほど達成の自信を高めていた。しかし61歳以上では，努力と結びついていない「能力」や「運」因子は，目標達成の自信に影響していなかった。年齢を重ねることによって得たであろう目標達成の自信に関連する要因の結果を学びつつ，対応や施策に活かしていく必要があろう。

本稿は加齢という表現をしたが，同一人物を追った縦断的研究ではなく，学士である女性を大きな共通項としており，歴史的なコーホートには言及できていない。それらについては，聞き取り調査などでの質的補充調査を考えている。また，努力

表５　目標達成の自信　年齢別の重回帰分析結果

	60歳以下	61歳以上
	β	β
他者の援助と努力	.35***	.35***
能力と努力	.48***	.61***
能力	-.15**	-.13
運	.13*	-.01
R^2	.57***	.60***

***$P<.001$　**$P<.01$　*$P<.05$

β：標準偏回帰係数

が独立して因子として成立しなかったことや、手段の保有と認識に分けて言及できなかったことは，下位項目の検討可能性を示唆するものなのか，今回の対象者の独自性なのかいくつかの調査をもとに検討していく必要がある。更に，本稿は学士女性の目標達成要因の認知を２分割した年齢に着目し分析したが，当然のことながら目標達成要因の認知にはさまざまな要因が永影すると予測される。結果が，沖縄の地域性なのか，学歴に影響されたことなのか，女性の特性なのかについて本稿では明らかにはできていない。今後の課題としたい。

お忙しい中，快く本アンケートに御協力くださいました，琉球大学の卒業生の皆様に心から感謝申し上げます。

参考文献

伊集章子，浅井玲子．沖縄の高齢学士女性の生活価値観：家政学科の卒業生を中心に．日本家庭科教育学会誌．53巻２号，2010，(印刷中)

Ellen A.Skinner, Michael Chapman,and Paul B Baltes.Control, Means-Ends, and Agency Beliefs: A New Conceptualization and Its Measurement During Childhood, Journal of personality and Social Psychlogy, 54, 1988, p.117-133

嘉数朝子，島袋美津恵，大城りえ．児童が認知した親の態度が児童の学習統制感に及ぼす影響．琉球大学教育学部紀要．第63集, 2003, p.167-179

唐澤真弓，宮下孝広，東洋．学習意欲と原因帰属に関する国際比較研究：CAMIによる調査．発達研究．第９巻，1993，p.87-98

島袋恒男，堀切尋代．青年期の自我発達に関するCAMIに基づく分析：自己確立への自信はどこからくるのか．比較民俗学のために．比較民俗学会．2001，p.423-437

島袋恒男，井上　厚．キャリアCAMIによる大学生の職業意識の分析：キャリアCAMI尺度の作成．琉球大学教育学部紀要．第49集，1996，p.171-181

嘉数朝子，島袋美津恵，大城りえ．児童が認知した親の態度が児童の学習統制感に及ぼす影響．琉球大学教育学部紀要．第63集, 2003, p.167-179

宮下孝広，真島真理，東洋．：学業達成に対する統制感における文化内変動の説明の試み．発達研究．第16巻，2001，p.105-113

宮下孝広，真島真理，東洋．小学生の学業成績を予測する認知的要因：他者との関係を含意する構成概念に注目して．発達研究．第15巻，2000．p.107-115

文部省．高等学校学習指導要領解説　家庭編．開隆堂出版．2000.

林艶華，島袋恒男．小学生における言語能力と学習発達の認知との関連に関する研究：沖縄と中国の比較．琉球大学教育学部紀要．第73集，2008，p.135-150